

# 高校野球における監督のコンピテンシーが 選手の動機づけに及ぼす影響

高松 祥平\*  
山口 泰雄\*\*

## 抄録

本研究の目的は、高校野球における監督のコンピテンシーが選手の動機づけに及ぼす影響を明らかにすることである。この目的を達成するために3つの研究を行った。まず、高校野球の監督7名に対するインタビュー調査を行い、245の主題をつけたコンピテンシー概念が得られた。KJ法によりカテゴリーの分類と命名を実施した結果、11カテゴリー48項目に分類された。

次に、高校野球における監督のコンピテンシー尺度を開発するため、質問紙調査を実施した。全国の硬式野球部が存在する高等学校から1,000校を無作為抽出し、417の有効回答票が得られた。項目分析、探索的因子分析、確認的因子分析を行った結果、6因子24項目が抽出された：1)信頼関係(6項目)、2)生活指導(3項目)、3)観察力(4項目)、4)自律性支援(4項目)、5)後援関係(3項目)、6)技術指導(4項目)。構成概念妥当性は、3つの要素から構成された。収束的妥当性( $\alpha$ 係数, AVE, CR)、弁別的妥当性、そして内容的妥当性である。以上の手順により、高校野球における監督のコンピテンシーを測定するための本尺度の信頼性及び妥当性が示された。

そして、近畿地区の8つの高等学校における硬式野球部員384名を対象とする質問紙調査を実施した。構造方程式モデリングにより、観察力、自律性支援、技術指導が心理的欲求の認知に有意な影響を及ぼし、自律性の認知と関係性の認知が内発的動機づけに有意な影響を及ぼすことが明らかになった。

キーワード：高校野球，指導，自己決定理論，内発的動機づけ，コンピテンシー

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11

\*\* 神戸大学大学院 〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11

# Effect of Managers' Competency of *Kokoyakyu* on Athletes' Intrinsic Motivation

Shohei Takamatsu \*  
Yasuo Yamaguchi\*\*

## Abstract

This study aimed to examine the effect of managers' competency of *Kokoyakyu* on athletes' intrinsic motivation. To achieve this, three studies were conducted. In the first study, we interviewed seven managers of *Kokoyakyu*. These interviews produced 245 items of competency. To categorize these items, one professor and four graduate students in sport sociology conducted a panel discussion. In the second study, to develop the scale of managers' competency of *Kokoyakyu*, we sent questionnaires to 1,000 managers of *Kokoyakyu*, out of which 421 managers responded. Item-total correlation analysis, exploratory factor analysis, and confirmatory factor analysis revealed six factors comprising 24 competency items: 1) trust relationship (six items), 2) educational guidance (three items), 3) powers of observation (four items), 4) autonomy support (four items), 5) relationship of supporters (three items), and 6) skill instruction (four items). Construct validity comprised three components—convergent validity (Cronbach's alpha, average variance extracted, and construct reliability), discriminant validity, and content validity. This scale was observed to be reliable and valid. In the third study, 365 athletes completed questionnaires assessing intrinsic motivation, perceived managers' competency, perception of autonomy, relatedness, and competence. Structural equation modeling revealed that powers of observation, autonomy support, and skill instruction had significant indirect effects on perception of psychological needs. Furthermore, perception of autonomy and relatedness had significant indirect effect on intrinsic motivation.

Key Words: *Kokoyakyu*, coaching, self-determination theory, intrinsic motivation, competency

---

\* Graduate School, Kobe University 3-11 Tsurukabuto, Nada, Kobe, Hyogo 657-8501

\*\* Graduate School, Kobe University 3-11 Tsurukabuto, Nada, Kobe, Hyogo 657-8501

## 1. はじめに

2014年、全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園大会）は96回目を迎えた。高校野球はこれまで、数々の名場面、名プレー、名選手が生まれ、日本国民にとっては欠かすことのできない存在となっている。

他方、高校野球における不祥事件数は近年増加傾向にある。この件に関して中村（2009, p193）は、「不祥事が増加しているというよりは、以前は不祥事と考えられなかったものが不祥事ととらえられるようになった」と述べている。例えば、指導者の暴力である。以前は、「愛のムチ」や「必要」と考えられ容認されていた指導者の暴力や体罰が、社会の意識の変化の中で問題視されるようになってきた。「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」（公益財団法人日本体育協会ら、2013）において、「指導者はスポーツを行う者の主体的な活動を後押しする重要性を認識し…（中略）スポーツを行う者が自主的にスポーツに取り組めるよう努めなければならない。」と記されているように、選手の自主性を重んじる指導スタイルが求められつつある。

指導者と選手の関係については、自己決定理論（Deci and Ryan, 1985）に基づくVallerand（1997）の動機づけモデルによって多くの検証がなされてきた。しかしながら、動機づけモデルにおいては様々な要因、文脈、状況を想定する必要がある（Vallerand, 2002）と指摘されるように、高校野球には高校野球ならではの文化的背景が存在する。そのため、まず「効果的あるいは優れた成果と関連する個人の基本的な特性」（Spencer and Spencer, 1993）と定義され、場面や状況に応じて作成されることが多いコンピテンシー概念を用いることで、高校野球における監督の行動特性を把握することとした。さらに、高校野球における監督のコンピテンシーを明らかにした上で、選手がそれをどのように認知し、動機づけに結びつけているのかを検証することは、スポーツ指導のメカニズムを把握する上においても意義のあることだと考えられる。

## 2. 目的

本研究の目的は、高校野球における監督のコンピテンシーが選手の動機づけに及ぼす影響を明らかにすることである。具体的には、1) 監督へのインタビューを通してコンピテンシー概念の抽出を行うこと、2) 監督への質問紙調査を通してコンピテンシー尺度の開発を行うこと、3) 選手への質問紙調査を通して監督のコンピテンシーが選手の動機

づけにどのように影響を及ぼすのかを検証する。

## 3. 方法

上記の目的を達成するために以下、3つのアプローチ方法を用いた。

### 3-1. 高校野球の監督に対するインタビュー調査

#### 1) 調査時期

調査時期は2014年9月4日～11月5日であり、それぞれの面接時間は40分～95分であった。

#### 2) 調査対象

7名の対象者は、2つに分けて選定した。コンピテンシーを抽出する際、一般的に用いられる方法は「行動結果面接法」である。これは、卓越したパフォーマーと平均的なパフォーマーに対してインタビューを行い、その中からコンピテンシーを明らかにする方法である。そのためA～Dにおいては、監督歴が20年以上の監督を選定した。E～Gにおいては、監督歴が5年以内の監督を選定した（表1）。

表1. インタビューの調査対象

対象	年齢	監督歴	最高戦績	育成功労賞 受賞経験	プロ野球選手 輩出経験
A	60代	32年	甲子園出場	有	有
B	50代	32年	都道府県大会ベスト8	有	有
C	50代	31年	都道府県大会ベスト4	有	無
D	50代	21年	都道府県大会ベスト4	無	無
E	30代	5年	都道府県大会ベスト8	無	無
F	20代	2年	都道府県大会初戦敗退	無	無
G	20代	1年	都道府県大会二回戦進出	無	無

#### 3) 調査項目

スペンサー・スペンサー（2011）の行動結果面接法（Behavioral Event Interview）を参考に調査項目を設定した。半構造インタビューを用いて、①監督としての職務や責任、②監督として、過去に経験した5～6つの重要な出来事（成功体験、失敗体験それぞれ2～3つ）、③監督に必要な要件をたずねた。

#### 4) 分析方法

インタビューによって得られたデータはテープ起こしを行い、テキスト化した。そして、コンピテンシーを示すと思われる全ての箇所にアンダーラインを引き、その箇所を表す主題を書き留めていく主題分析を行った。その後、KJ法によって類似する概念を複数のカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーに命名を行った。

### 3-2. 高校野球の監督に対する質問紙調査

#### 1) 調査時期

調査時期は2014年12月18日～2015年1月16日であった。

#### 2) 調査対象

硬式野球部のある高校4,030校(2014年度時点)から系統抽出法により1,000校を抽出し、監督に対して郵送法による配布を行った。回収に関しては、返信用封筒を同封し返送するように依頼した。回収数は421票(回収率42.1%)であり、有効回答数は417票であった。

#### 3) 調査項目

研究3-1を通して抽出した高校野球におけるコンピテンシー48項目と個人的属性として年齢、監督歴、プロ野球選手輩出経験、育成功労賞受賞経験、過去の最高戦績をたずねた。

#### 4) 分析方法

分析には、SPSS PASW Statistics 18.0 及び SPSS Amos 18.0 を用いた。まず、高校野球における監督のコンピテンシー尺度構成を把握するために項目分析を行った後、一般化された最少二乗法のプロマックス回転による探索的因子分析を行った。因子間の関連性の検討には、相関分析により Pearson の積率相関係数を算出した。また、尺度の信頼性に関しては、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。次に、探索的因子分析によって得られた尺度構成がデータに適合しているかを検証するため、確認的因子分析を行った。モデルの適合度指標は、 $\chi^2/df$ , GFI, AGFI, NFI, CFI, RMSEA を用い、尺度の構成概念妥当性の検証を行った。

### 3-3. 選手に対する質問紙調査

#### 1) 調査時期

調査時期は2015年2月1日～2015年2月14日であった。

#### 2) 調査対象

近畿地区の8つの高等学校における384名の硬式野球部員を対象とした。そのうち、3校(179名)は過去5年以内に甲子園大会に出場経験のある高等学校を選定した。調査票の回収にあたっては、対象とした高等学校にて集合調査を実施した。

#### 3) 調査項目

##### A. コンピテンシーの認知

研究3-2を通して得られた高校野球における

監督のコンピテンシー尺度24項目を設定した。1(全くそう思わない)～7(とてもそう思う)の7段階のリッカート尺度を用いてたずねた。

##### B. 内発的動機づけ

Pelletier et al. (2013) の3項目から構成される内発的動機づけ(内発的調整)尺度を用いた。1(全くあてはまらない)～7(とてもあてはまる)の7段階のリッカート尺度を用いてたずねた。

##### C. 心理的欲求の認知

有能さの認知に関しては、Amorose (2003) の3項目から構成される尺度を援用した。関係性の認知に関しては Standage et al. (2005) の5項目からなる尺度、自律性の認知に関しては、藤田・松永(2009)の4項目からなる尺度を用いた。それぞれ7段階のリッカート尺度でたずねた。

#### 4) 仮説の設定

藤田・杉原(2007)は心理的欲求(有能さ・自律性・関係性)の充足が内発的動機づけに有意な影響を及ぼすことを大学生の運動参加の観点から明らかにしている。また、Hollebeak and Amorose (2005)は大学生アスリートを対象とした研究で、コーチのリーダーシップ行動が選手の心理的欲求の認知を媒介として、内発的動機づけに影響を及ぼすことを明らかにしている。これらは、まさに Mageau and Vallerand (2003)のコーチと選手間の動機づけモデルを支持するものである。したがって、以下の仮説を導き出した。

H1: 高校野球における監督のコンピテンシーは、選手の心理的欲求の認知に影響を及ぼす。

H2: 選手の心理的欲求の認知は、内発的動機づけに影響を及ぼす。

#### 5) 分析方法

SPSS PASW Statistics 18.0 及び SPSS Amos 18.0 を用い、構造方程式モデリングによる分析を行った。モデルの適合度指標は、 $\chi^2/df$ , GFI, AGFI, NFI, CFI, RMSEA を用い、モデル全体の評価を行った。

### 4. 結果及び考察

#### 4-1. 高校野球の監督に対するインタビュー調査

7名の監督に対するインタビュー調査から245の主題をつけたコンピテンシー概念が得られた。野球経験があり、スポーツ社会学を専門とする教授1名及び大学院生4名でパネルディスカッションを行い、KJ法によりカテゴリーの分類と命名を実施した。類似する項目、不必要と思われる項目を消去した結

果, 11 カテゴリー48項目に分類された。それぞれのカテゴリー名は「選手との接し方」, 「観察力」, 「叱り方」, 「練習方針」, 「チーム作り」, 「ポジティブな対応」, 「選手の自立」, 「戦略」, 「指導姿勢」, 「マナー教育」, 「クラブ外関係」であった。

#### 4-2. 高校野球の監督に対する質問紙調査

##### 1) 回答者の基本的属性

表2は回答者の基本的属性を示している。年齢は30歳代が最も多く33.2% (138名), 次いで40歳代が28.4% (118名), 50歳代が23.8% (99名)であった。監督歴は10年未満が49.5% (206名), 10~19年が22.8% (95名), 20~29年が20.7% (86名)であり, 40年以上が1名いた。また, プロ野球選手輩出経験者が16.1% (67名), 育成成功労賞受賞経験者が5.1% (21名), 甲子園出場経験者が11.5% (47名)であった。

表2. 回答者(監督)の基本的属性

		n	%
年齢	20歳代	43	10.3
	30歳代	138	33.2
	40歳代	118	28.4
	50歳代	99	23.8
	60歳代	18	4.3
監督歴	10年未満	206	49.5
	10~19年	95	22.8
	20~29年	86	20.7
	30~39年	28	6.7
	40年以上	1	0.2
プロ野球選手輩出経験	有	67	16.1
	無	349	83.9
育成成功労賞受賞経験	有	21	5.1
	無	392	94.9
最高戦績	都道府県大会	298	72.9
	地方大会	64	15.6
	甲子園大会	47	11.5

##### 2) 項目分析 (Item-Total 相関分析)

項目全体得点と各質問項目との相関を求め, 有意ではない項目は削除対象とした。加えて, 対象数が多い時は, 相関係数を.30もしくは.40以上を基準にするのが望ましい(徳永, 2004)とされているため, 項目全体得点との相関係数が.40に満たない項目は削除対象とした。その結果, 3項目を削除した。

##### 3) 探索的因子分析

高校野球における監督のコンピテンシー尺度の構成を把握するため, 探索的因子分析を行った。その結果, 6因子24項目が抽出された(表3)。それぞれの因子は「信頼関係(6項目,  $\alpha=.76$ )」, 「生活指導(3項目,  $\alpha=.84$ )」, 「観察力(4項目,  $\alpha=.73$ )」, 「自律性支援(4項目,  $\alpha=.73$ )」, 「後援関係(3項目,  $\alpha=.74$ )」, 「技術指導(4項目,  $\alpha=.68$ )」と命名した。

##### 4) 確認的因子分析

次に, 得られた因子構造がデータに適合するかを確認するため, 確認的因子分析を行った。モデル適合度は $CMIN/DF=2.19$ ,  $GFI=0.91$ ,  $AGFI=0.88$ ,  $NFI=0.84$ ,  $CFI=0.91$ ,  $RMSEA=0.053$ であり, 比較的良好な値であった。そして, 本尺度の構成概念妥当性の検証を行うため, 収束的妥当性と弁別的妥当性の観点から判断した。まず, AVEを算出し, 全ての因子において.50を上回ったことから, 収束的妥当性が支持された(Fornell and Larcker, 1981)。また, CRが全ての因子で.70以上の値であり, 基準値(Hair et al., 2010)を超えたため収束性及び内的整合性が示された。次に, AVEと因子間相関の2乗を比較した結果, 全ての因子間でAVEの方が高く, 弁別的妥当性が示唆された。以上の結果により, 本尺度の構成概念妥当性は支持されると判断した。

#### 4-3. 選手に対する質問紙調査

##### 1) 記述統計及び相関

表4は, 各変数の記述統計と変数間の相関を示している。コンピテンシーの認知に関しては, 生活指導( $M=5.95$ )が最も高い値を示し, 信頼関係( $M=4.79$ )が最も低い値を示した。また, 心理的欲求の認知においては, 関係性の認知( $M=5.71$ )が最も高く, 有能さの認知( $M=3.85$ )が最も低い値であった。そして, 選手の内発的動機づけと心理的欲求である自律性, 関係性, 有能さの認知は有意な正の相関を示した。コンピテンシーの認知と心理的欲求の認知に関しては, 生活指導と有能さの認知, 後援関係と有能さの認知を除く全ての項目で有意な正の相関がみられた。内的整合性を示す $\alpha$ 係数は後援関係( $\alpha=.655$ )がやや低かったものの, その他の因子においては $\alpha=.703-.899$ の値を示したため, 尺度の信頼性は確認された。

表3. 監督のコンピテンシーに関する探索的因子分析の結果

項目	因子負荷量					
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
<b>F1 信頼関係 (<math>\alpha=.762</math>)</b>						
選手の気持ちを理解しようとしている	.691					
選手個人に声かけを行っている	.657					
選手の精神的なケアを行っている	.624					
選手と信頼関係を築いている	.583					
選手に、自分には何が足りないのかを気づかせている	.440					
「ほめる」、「叱る」のメリハリをつけている	.425					
<b>F2 生活指導 (<math>\alpha=.840</math>)</b>						
マナーの大切さを教えている		.884				
挨拶の重要性を教えている		.883				
選手に規則正しい生活を教えている		.674				
<b>F3 観察力 (<math>\alpha=.730</math>)</b>						
選手の適正ポジションを見抜いている			.729			
選手の能力を把握している			.715			
選手の性格を把握している			.568			
選手の調子を把握している			.469			
<b>F4 自律性支援 (<math>\alpha=.725</math>)</b>						
選手自身で探求する部分を残している				.782		
選手の主体性を重要視している				.671		
選手自ら目標を持たせている				.553		
選手同士で指摘し合うように促している				.538		
<b>F5 後援関係 (<math>\alpha=.739</math>)</b>						
OBと良好な関係を築いている					.868	
保護者と良好な関係を築いている					.629	
地域住民と良好な関係を築いている					.619	
<b>F6 技術指導 (<math>\alpha=.681</math>)</b>						
試合中、指示を的確に伝えている						.639
試合中、選手と情報を交換している						.623
試合中、各ポジションの動き方を把握している						.526
練習中のプレーに関して具体的なアドバイスをしている						.439
	F1	F2	F3	F4	F5	F6
因子間相関	F1					
	F2	.410				
	F3	.226	.253			
	F4	.370	.314	.267		
	F5	.518	.455	.355	.401	
	F6	.317	.299	.348	.311	.365

表 4. コンピテンシーの認知, 心理的欲求の認知, 内発的動機づけの項目平均値と標準偏差および各因子間の相関マトリクス

要因	因子間相関									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 信頼関係 ( $\alpha = .769$ )										
2. 生活指導 ( $\alpha = .838$ )	.42***									
3. 観察力 ( $\alpha = .715$ )	.47***	.18***								
4. 自律性支援 ( $\alpha = .755$ )	.43***	.52***	.32***							
5. 後援関係 ( $\alpha = .655$ )	.22***	.29***	.20***	.22***						
6. 技術指導 ( $\alpha = .713$ )	.51***	.44***	.39***	.51***	.05*					
7. 自律性の認知 ( $\alpha = .780$ )	.33***	.29***	.32***	.39***	.09**	.40***				
8. 関係性の認知 ( $\alpha = .885$ )	.22***	.20***	.23***	.26***	.12*	.18***	.23***			
9. 有能さの認知 ( $\alpha = .899$ )	.04*	.00	.18***	.07*	-.07*	.11*	.17***	.29***		
10. 内発的動機づけ ( $\alpha = .703$ )	.24***	.25***	.22***	.33***	.19***	.22***	.37***	.26***	.11*	
平均値	4.79	5.95	5.16	5.31	5.51	5.24	4.66	5.71	3.85	5.63
標準偏差	0.94	1.09	0.91	0.95	1.04	1.05	0.99	0.91	1.25	0.94

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 2) 仮説の検証

監督のコンピテンシーが選手の動機づけにどのように影響を及ぼすのかを明らかにするため、仮説の検証を行った。まず、コンピテンシーの認知6因子から心理的欲求の認知3因子、心理的欲求の認知3因子から内発的動機づけへの影響を全て仮定したモデル(モデル1)を検証した。その後、有意な値を示さなかったパスを削除したモデル(モデル2)、さらに修正指標をもとに誤差間の相関を認めるモデル(モデル3)の検証を行った(図1)。表5は各モデルの適合度を示している。モデル3においては良好な適合度であり(Hair et al., 2010), データと一致していることが示唆された。

分析の結果、「H1: 高校野球における監督のコンピテンシーは、選手の心理的欲求の認知に影響を及ぼす」と「H2: 選手の心理的欲求の認知は、内発的動機づけに影響を及ぼす」は、ともに一部支持される結果となった。H1についてみていくと、コンピテンシーの認知を構成する因子である信頼関係、生活指導、後援関係は、どの心理的欲求の認知にも影響を及ぼさなかった。つまり、学校生活や野球部での生活を整えることやOBや保護者、地域住民との関係を良好に保つことにつとめるのは直接的に選手の心理的欲求を充足させることには繋がらない可能性がある。また、信頼関係の構築においても直接的には心理的な欲求を満たすことはないことが示唆された。他方、観察力は全ての心理的欲求の認知に影響を及ぼすことが明らかになった。監督が選手の様子を観察し、自らを把握するようにつとめてくれることは、選手にとって重要な働きかけとなっている。また、

Mageau and Vallerand (2003)において、重要視されていた自律性支援は自律性の認知と関係性の認知に有意な影響は及ぼしたが、有能さの認知には有意な影響は及ぼさなかった。自律性を尊重することで、選手の自主性が育まれ、部員同士の良好な関係作りへと繋がるものの、野球の有能さにはあまり影響しないことが示唆される。そして、技術指導においては自律性の認知に有意な影響を及ぼしたことから、監督の目指す野球と選手の目指す野球の方針を一致させる要因になり得ることが分かったが、これも野球の有能さに直接影響を及ぼさなかった。

H2についてみていくと、自律性の認知と関係性の認知から内発的動機づけには有意な影響を及ぼすことが明らかになった。これは、所属する野球部の練習や試合において、自分のやりたいことができることや他の部員から理解されていたり、支持されていると感じることが内発的動機づけに繋がっていると解釈することができる。しかしながら、先行研究(Hollembeak and Amorose, 2005)とは異なり、有能さの認知は内発的動機づけに有意な影響を及ぼさなかった。藤田(2010)は、中学生を対象とした研究において、そもそも有能さの欲求は他の欲求と比べて社会的要因の影響を受けにくく、長期にわたり運動が上達したこと、熟達したことを繰り返し実感できるようにする重要性を指摘している。つまり、本研究においても自律性の認知、関係性の認知と比べて、有能さの認知の項目平均値が低かったことが示しているように、選手は自らの野球の有能さを実感することから直接的に内発的動機づけには繋がっていないと考えられる。

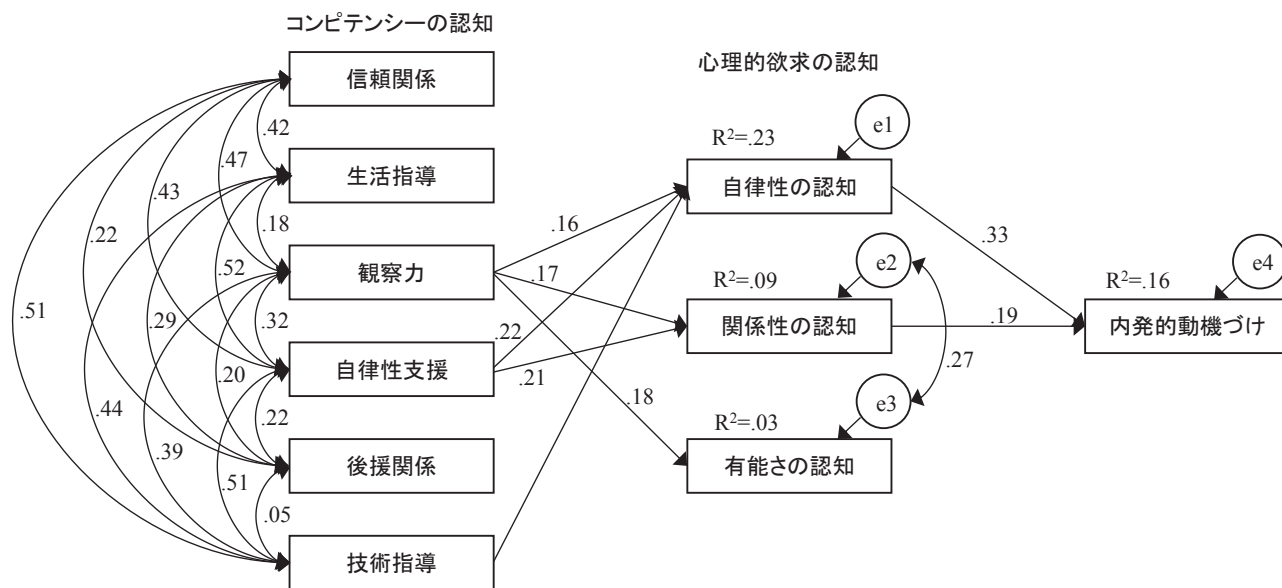


図 1. 構造方程式モデリングによる結果 (モデル 3)

表 5. コンピテンシーの認知が内発的動機づけに影響を及ぼす各モデルの適合度

	$\chi^2/df$	GFI	AGFI	NFI	CFI	RMSEA	AIC
モデル1	6.31	0.97	0.81	0.93	0.94	0.121	148.83
モデル2	3.18	0.97	0.91	0.92	0.94	0.077	136.01
モデル3	2.07	0.98	0.94	0.95	0.97	0.054	111.37

## 5. まとめ

本研究の目的は、高校野球における監督のコンピテンシーが選手の動機づけに及ぼす影響を明らかにすることであった。3つのアプローチによる分析の結果、以下2点の結果が導き出された。

- 1) 高校野球における監督のコンピテンシーとして、「信頼関係 (6項目)」、「生活指導 (3項目)」、「観察力 (4項目)」、「自律性支援 (4項目)」、「後援関係 (3項目)」、「技術指導 (4項目)」の6因子24項目が抽出された。尺度の信頼性・妥当性は十分な値を示した。
- 2) 監督のコンピテンシーを構成する因子である「観察力」が選手が認知することで、3つの心理的欲求が充足される。「自律性支援」を認知することは「自律性の認知」と「関係性の認知」を満たし、「技術指導」が「自律性の認知」へと繋がることで、「自律性の認知」と「関係性の認知」がそれぞれのコンピテンシーの認知から「内発的動機づけ」への影響を媒介することが明らかとなった。

以上のように、本研究では、高校野球における監督のコンピテンシー尺度を開発し、監督と選手間の指導メカニズムの一端を示すことができた。しかしながら、2つの仮説は一部支持されるという形であった。Vallerand (1997) が内発的・外発的動機づけの階層モデルによって個人差を考慮する必要性を指摘しているように、今後は様々な要因、文脈、状況を想定しなければならない。

## 参考文献

- Amorose, A. J. (2003) Reflected Appraisals and Perceived Importance of Significant others' Appraisals as Predictors of College Athletes' Self-Perceptions of Competence. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 74 (1) : 60-70.
- Deci, E. L., and Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Fornell, C., and Lacker, D. F. (1981) Evaluating



structural equation models with unobservable variables and measurement error. *Journal of Marketing Research*, 18 (1) : 39-50.

藤田勉 (2010) 体育・スポーツにおける動機づけの横断的検討：先行研究の概観から。鹿兒島大学教育学部教育実践研究紀要, 20 : 87-99.

藤田勉・松永郁男 (2009) 運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動。鹿兒島大学教育学部教育実践研究紀要, 19 : 71-80.

藤田勉・杉原隆 (2007) 大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ。体育学研究, 52 : 19-28.

Hair, J. F., Black, W. C., Babin, B. J., and Anderson, R. E. (2010) *Multivariate data analysis -A global perspective-*, Pearson Education, Inc., New Jersey: Upper Saddle River.

Hollembeak, J., and Amorose, A. J. (2005) Perceived Coaching Behavior and College Athletes' Intrinsic Motivation: A test of Self-Determination Theory. *Journal of Applied Sport Psychology*, 17 (1) : 20-36.

Mageau, G. A., and Vallerand, R. J. (2003) The coach-athlete relationship: A motivational model. *Journal of Sport Sciences*, 21, 883-904.

中村哲也 (2010) 学生野球憲章とはなにか。東京：青弓社。

Pelletier, L., Rocchi, M., Vallerand, R., Deci, E., and Ryan, R. (2013) The revised sport motivation scale. *Psychology of Sport and Exercise*, 14 (3) , 329-341.

Standage, M., Duda, J.L., and Ntoumanis, N. (2005) A test of self-determination theory in school physical education. *British Journal of Educational Psychology*, 75: 411-433.

Spencer, L. M., and Spencer, S. M. (1993) *Competence at work*. Hoboken: John Wiley and Sons.

スペンサー・スペンサー：梅津祐良ほか訳 (2001) *コンピテンシー・マネジメントの展開－導入・構築・活用*。東京：生産性出版。

徳永幹雄 (2004) *体育・スポーツの心理尺度*。東京：不味堂出版。

Vallerand, R. J. (1997) *Toward a hierarchical*

*model of intrinsic and extrinsic motivation. Advances in experimental social psychology*, 29: 271-360.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

